

KKJ実践における京都大学と慶應大学の相互イメージとその変化

小 林 亮
(慶應義塾大学)

Mutual Image and Its Change between Kyoto University and Keio University in KKJ Project

Makoto KOBAYASHI
(Keio University)

1. 問題

1.1 本研究の枠組み

本論文は、京都大学（高等教育教授システム開発センターの提供する全学共通科目「教育とコミュニケーション」）と慶應義塾大学（総合政策学部井下理教授が担当する「井下研究会」）との共同教育実践であるKKJプロジェクト（Kyoto-Keio Joint Seminar）において、集団間の社会的相互作用の一側面として、両学の参加学生の他者イメージおよび鏡映的自己イメージを検討し、教育実践の進行に伴うそのイメージの変化過程を分析しようとするものである。

社会的相互作用のプロトタイプは、2個人間に生起するものであるが、異文化理解の観点からは、文化的・社会的背景を異にする集団間に起こる相互作用の過程が注目される。学生主導型授業を目指し、所属大学の枠を超えた学びの共同体を形成することを目的とするKKJ実践も（神藤 et al., 2000）、京都大学と慶應大学という地域（関西と関東）、設立主体（国立と私立）、学風の伝統（教養教育重視の伝統と実学教育重視の伝統）を異にする広義の異文化集団の出会いであり（井下, 2000）、一定の教育的目的に基づいて組織化された集団間相互作用と考えることができる。こうした異質の集団が出会い、共同の教育実践を行なっていく際に、当事者がお互いに相手集団に対してどのような他者イメージを抱いているか、またその相手集団から照射された形でどのような自己イメージを持つかは、両集団間にどのような相互作用が起きるかを方向付けていく重要な要因である。

1.2 他者イメージと鏡映的自己イメージ

Cooley（1902）の象徴的相互作用主義においては、他者の目に映る自分の姿についての想像である鏡映的自己（looking-glass self）が、他者に対する社会的態度を規定し、他者との相互作用を展開していく重要な要因であると考えられている。つまり他者が自分のことをどう見、どう評価していると考ええるかにより、私達はその他者に対する態度や行動を調整し、変えていくという意味である。Cooleyの鏡映的自己という考え方は、Meadにおける主我（I）と対置された客我（Me）の概念にも継承されている（Mead, 1934）。

一般に、社会的相互作用のあり方は、当事者の自己概念に大きく影響されると言われるが、直接的な自己像ではなく、いったん想像の中での他者の目を經由して形成された再帰的自己像（reflected self-image）である鏡映的自己は、相互作用の相手の視線を前提としているだけに、社会的相互作用過程の分析にとって、一層重要な意味を持っていると言えよう。同時に、こうした鏡映的自己は、発生的に見れば社会的経験や社会的活動の過程を通じて形成されるという社会先在的側面を持つため、鏡映的自己と社会的相互作用との関係は、前者から後者への影響という一方向的なプロセスではなく、その影響は双方向的であると考えなければならない。特定の他者の視線が措定されるためには、その他者との現実の相互作用が前提となっているのが普通だからである（梶田, 1988を参照）。

自己についてのシャペルソン・モデルにおいても、自己概念は社会的相互作用の中で形成されると考えられている

が、そこでは特に、仲間に関連した自己概念と重要な他者に関連した自己概念という2つの下位概念が重視されている (Shavelson et al., 1976)。

ここで注意しておかねばならないが、象徴的相互作用主義の立場からすると、単に自己概念が社会的相互作用によって形成されるだけでなく、そこで形成された鏡映的自己像は、同時に自分が相互作用を行なう他者のイメージに対する規定因としても働くということである (Kobayashi, 1995)。つまり、社会的相互作用という「場」において、再帰的・反省的プロセスはその相互作用を成り立たせている自己と他者の両者のイメージを同時に規定してゆくと考えられるのである。古くはBaldwin以来、社会的相互作用における自己イメージと他者イメージとの間にある種の平行関係があるとする考え方が受け継がれてきたのは、この原理に基づいている (Baldwin, 1902)。Oppenheimerらは、発達の視点から、自己概念と他者概念の発達には、構造的にも内容的にも並行関係が認められると主張したが (Oppenheimer et al., 1990)、この並行関係は、社会的相互作用における上記の再帰的プロセスなしには考えられないものである。したがって社会的相互作用におけるイメージの問題を検討するためには、相互作用の相手に対する他者イメージと、その他者の想像上の視線を経由した鏡映的自己イメージとの関連を常に念頭に置いておく必要がある。そして自己の所属集団に対して肯定的な価値づけをしている者ほど、異質な集団に対して共感性が高く受容的である、というBerryらの研究 (Berry & Pleasants, 1984) を踏まえれば、鏡映的自己イメージが肯定的な者はそうでない者よりも、好意的な他者イメージを持つのではないかと予想されるのである。

1.3 集団イメージと集団成員イメージ

自己イメージと他者イメージとの関係と並んで、本稿の背景となるもう一つ重要な視点は、個人間相互作用と集団間相互作用との関係である。社会的相互作用という場合、一般には個々人の間で社会的行動がやりとりされ相互に影響を与え合ってゆく過程を指すことが多い。しかし個人間の相互作用は、その個人を含む集団間の相互作用という、より大きな枠組みの中で起こっていることがしばしばある。これまでは、こうした集団間の相互作用とその中で起きている個人間相互作用のプロセスが必ずしも体系的に関連づけられてこなかったきらいがある。本調査では、この両プロセスの関連性をイメージの形成と変容という観点から探るために、他者イメージと鏡映的自己イメージのいずれに関しても、集団イメージ (他校イメージおよび鏡映的自校イメージ) と集団成員イメージ (他校生イメージおよび鏡映的自校生イメージ) の両方を調べ、両者がどう互に対応しているかを明らかにしようところみだ。

1.4 異文化適応におけるイメージの変容

近年、留学交流の増大にともない、留学生等を対象にした異文化適応のプロセスについての研究が非常に盛んになりつつある。横田による適応の内的発達モデルにおいては、異文化への適応過程のなかで、留学生の内面にある異文化の枠組みの変化と同時に、本人のもともとの母文化の枠組み自体にも変容が起こるという相互作用のプロセスが強調されており、その枠組みとの関連でホスト国である相手文化のイメージ変容の過程が分析されている (横田, 1997)。またイメージの内容については、ホスト国での適応が進むにつれ、当初はステレオタイプに支配されていた相手文化のイメージが、次第に分化されたものとなり、過度の理想化や否定性を脱したより等身大で親近感のある像に変化してゆく傾向のあることが幾つかの研究によって指摘されている (Adler, 1975; 近藤, 1981; 星野, 1983)。

本調査の枠組みを提供しているKKJ実践は、前述したように、京大と慶大という広い意味での異文化集団の出会いと相互作用のプロセスとして捉えることができる。したがって、ここにおいても教育実践の進行に伴って、相互のイメージの変容が多様化と親近感の増大という方向で見出されるのではないかと予想される。またイメージ分化のもう一つの現れとして、当初に比べ集団イメージと集団成員イメージとが相互により独立したものになってゆくのではないかと予想される。勿論留学生の異文化体験と異なり、このKKJにおいては、渡航者とホスト国という一方的な関係は存在しないし、遠隔教育的な関心に基づく2大学間での共同教育実践であるので、異文化への適応という問題は少なくとも前面には出てこない。参加者はほぼ全員が大きな枠組みで見れば日本という同一文化集団に属しており、民族的背景や言語を共有している。しかし、むしろそれゆえに、もしKKJ実践においても、予想した方向での相互イメージの変容が観察されるのであれば、それは集団間相互作用におけるイメージの問題を、海外異文化適応の問題に限定されないより一般的な次元の過程として捉えることを可能にするのではないかと期待されるのである。

1.5 オンライン相互作用とオフライン相互作用

KKJ授業設計の詳細については、本誌掲載の他の諸論文に詳しいのでここでは触れないが、「場」という観点から見れば、基本的に「正規の授業」「インターネット」「合同合宿」からなる「3つのリアリティー」の有機的総合という点にこの授業実践の特色があるといえる（田中，2000；井下，2000）。このうち、集団間相互作用については特に後2者、つまりWeb掲示板というオンラインでの相互作用（2000年度春学期を通じて継続）と、学期中に修善寺の研修施設「ラフォーレ」で行なわれた合同合宿におけるオフラインでの対面相互作用（2000年6月30日－7月2日）とが問題になる。このオンラインとオフラインという2種の相互作用が、それぞれ参加学生の他校（ならびに自校）イメージとその変化にどのような影響を与えるかという問が立てられよう。本調査ではしかし、この両種の相互作用の影響を別箇に分析するというよりも、両者の相互作用が総合する場としての合同合宿に注目し（つまり合宿での対面相互作用プロセス自体に、それまで行われてきたオンライン上での相互作用の蓄積が前提され、その中に包み込まれている、という意味で）、この合同合宿を経る前後で、相互のイメージがどのように変容したかを調べることにした。

1.6 仮説

これまで述べてきた問題点から、集団間相互作用の一種としてのKKJ実践における京都大学生および慶應大学生の相互イメージに関して、次のような仮説が立てられた。

仮説1：京都大学生と慶應大学生相互の他校イメージは、合同合宿での相互作用を通じて、ステレオタイプのイメージから、より多様で親近感のあるイメージへと変化するだろう。

仮説2：集団イメージ（他校イメージ）と集団成員イメージ（他校生イメージ）とは、合同合宿の相互作用を通じて、相互により分化されたものへと変化してゆくだろう。

仮説3：肯定的な鏡映的自校イメージを持つ者は、否定的な自校イメージを抱く者よりも、KKJ実践の相手集団に対する他校イメージはより好意的なものになるだろう。

2. 方法

2.1 KKJ共同教育実践のスケジュール

本調査の枠組みを提供するKKJは、遠隔大学間共同ゼミとして平成11年（1999年）度に発足したプログラムであるが、本イメージ調査が行なわれたのは平成12年（2000年）度のKKJ実践においてである。KKJ実践の期間は、平成12年度の春学期全体に亘っており（2000年4月－7月）、京都大学での『教育とコミュニケーション』と慶應義塾大学での『井下研究会』とが通常授業としてそれぞれ独立に進行する傍ら、慶應側のスタッフによって開設されたWeb掲示板が、京大・慶大共通の議論や対話の場として活用された。そして6月30日から7月2日にかけて、修善寺の研修施設『ラフォーレ』において、両大学の受講生（京大21名、慶大18名）ならびにスタッフ（京大6名、慶大7名）が集い、2泊3日の合同合宿を体験した。したがって、基本的にこの合同合宿が、両集団がオフラインでの対面相互作用を行なった唯一の場であったことになる。本稿の中心テーマが、合宿での直接的相互作用が、参加学生の他校イメージおよび鏡映的自校イメージにどのような変化をもたらしたかを見るところにあったので、KKJ参加学生のイメージを測る調査は、合宿前（プレ調査）と合宿後（ポスト調査）の2時点で行なわれた。

2.2 プレ調査の質問項目と手続き

合宿での対面相互作用を経験する前に、慶應大学生と京都大学生がそれぞれ相手集団と自集団に対してどのようなイメージを持っているかを調べるために、プレ調査が行なわれた。このプレ調査は、1）他校イメージ、2）他校生イメージ、3）鏡映的自校イメージ、4）鏡映的自校生イメージ、の4項目についてそれぞれ自由記述させる方法で行なわれた。

表1 プレ調査における質問項目

京都大学生に対しての質問

質問1. あなたは慶應義塾大学についてどのようなイメージを持っていますか？あなたの慶應イメージを自由に

お書き下さい。

質問2. あなたは慶應義塾大学の学生についてどのようなイメージを持っていますか？あなたの慶大生イメージを自由にお書き下さい。

質問3. あなたは慶應義塾大学の学生が、京都大学についてどのようなイメージを持っていると思いますか？想像してお書き下さい。

質問4. あなたは慶應義塾大学の学生が、京大の学生についてどのようなイメージを持っていると思いますか？想像してお書き下さい。

慶應大学生に対しての質問

質問1. あなたは京都大学についてどのようなイメージを持っていますか？あなたの京大イメージを自由にお書き下さい。

質問2. あなたは京都大学の学生についてどのようなイメージを持っていますか？あなたの京大生イメージを自由にお書き下さい。

質問3. あなたは京都大学の学生が、慶應義塾大学についてどのようなイメージを持っていると思いますか？想像してお書き下さい。

質問4. あなたは京都大学の学生が、慶應の学生についてどのようなイメージを持っていると思いますか？想像してお書き下さい。

質問紙は、慶應大学の受講生に対しては、5月16日の『井下研究会』の席上で各自に配布された。持ち帰って記入してもらい、1週間後に回収された(N=18)。京都大学の受講生に対しては、6月14日の『教育とコミュニケーション』の席上で質問紙を各自に配布した。同じく持ち帰って記入してもらい、1週間後に回収された(N=20)。

2.3 合宿でのイメージゲーム

合同合宿の初日に、このプレ調査の結果をもとに、両大学の受講生がそれぞれどのような他校イメージと鏡映的自校イメージを持っているかを当てあう「イメージゲーム」が、グループ対抗形式で行なわれた。これを通じて、参加者全員に、京大生ならびに慶大生がどのような他校イメージと鏡映的自校イメージを持っているかが情報として伝えられた。これにより、各参加学生において自他イメージへの内省が促進されること、またそれを通じて相手大学の学生との出会いと対話のプロセスが促進されることが期待された。

2.4 ポスト調査の質問項目と手続き

合同合宿の終了後、この合宿での経験を通じて双方の他校イメージと鏡映的自校イメージがどのように変化したかを調べるため、ポスト調査が行なわれた。ポスト調査は、1) 他校イメージ、2) 他校生イメージ、3) 他校(生)イメージの変化とその理由、4) 鏡映的自校(生)イメージの変化とその理由、の4項目についてそれぞれ自由記述させる方法で行なわれた。

表2 ポスト調査における質問項目

京都大学生に対しての質問

質問1. あなたは現在、慶應義塾大学についてどのようなイメージを持っていますか？

質問2. あなたは現在、慶應義塾大学学生についてどのようなイメージを持っていますか？

質問3. 6月30日～7月2日の修善寺合宿に参加することで、あなたの慶應義塾大学(学生)イメージは、変わったと思いますか。それはなぜ(何)ですか？

質問4. 6月30日～7月2日の修善寺合宿に参加することで、慶應義塾大学の学生から見た京都大学(学生)イメージは、変わったと思いますか。それはなぜ(何)ですか？

慶應大学生に対しての質問

質問1. あなたは現在、京都大学についてどのようなイメージを持っていますか？

質問2. あなたは現在、京都大学学生についてどのようなイメージを持っていますか？

質問3. 6月30日～7月2日の修善寺合宿に参加することで、あなたの京都大学（学生）イメージは、変わったと思いますか。それはなぜ（何）ですか？

質問4. 6月30日～7月2日の修善寺合宿に参加することで、京都大学の学生から見た慶應大学（学生）イメージは、変わったと思いますか。それはなぜ（何）ですか？

質問紙は、京都大学の参加者に対しては、7月5日の『教育とコミュニケーション』最終回の授業で各自に配布された。持ち帰って記入してもらい、1週間後に回収された（N=20）。慶應大学の参加者に対しては、7月11日の『井下研究会』前期最終回の授業で質問紙を各自に配布した。同じく持ち帰って記入してもらい、1週間後に回収された（N=17）。

2.5 データの集計

このようにして合宿の前後、2回に分けて行なわれたイメージ調査での回答は、分析の出発点として、2人の評定者によりそれぞれ独立にカテゴリー分けがなされた。まず個々の言明が、どのようなテーマに関するものかの分類を行ない（例えば校舎、学風、文化など）、さらにそれぞれのテーマについて記述内容を人数とともに提示した。ひとりの被験者について複数の言明がある場合は、個々の言明をそれぞれカウントしたので、表中の人数の総計は被験者数（サンプル）より大きくなる。

回答のカテゴリー分けに関する両評定者間の一致度はきわめて高かったが、不一致のカテゴリーについては、話し合いの上、一致したカテゴリーを作成した。以下に示す調査結果は、すべてこのカテゴリーごとの集計に基づいている。

3. 結果

3.1 プレ調査における他校イメージ

まず合宿前のプレ調査において、慶應大学生が回答した京都大学イメージおよび京都大学の学生イメージを表3に提示する。テーマ、記述内容のいずれについても、のべ人数の多い順に並べた。但し、同数の場合は順不同である。（この表示原則は以下の表でも同様。）

表3 慶應大学生の京都大学に対するイメージ（プレ調査：合宿前）

京都大学のイメージ			京都大学の学生のイメージ		
テーマ	記述内容	人数	テーマ	記述内容	人数
学風・校風 (17)	自由・放任	7	性格 (22)	自分をしっかり持ってる	4
	ほのぼの、のどか	2		変人	4
	アカデミック	2		マイペース	3
	広く開かれた大学	1		個人主義	2
	反権威主義	1		自由	2
	理数系に強い	1		真面目な努力家	2
	かたい	1		柔和・温厚	2
	ゆったりした空気	1		自己主張が激しい	2
	カオス	1		感性がすごい	1
人 (14)	頭がいい	5	学問・知性 (11)	学者肌、研究者タイプ	4
	個性が強い	2		頭がいい	3
	変人の集合体	2		理系	1
	有名人を多く輩出	2		自分の理論・学説を持つ	1
	男子学生が多い	1		哲学っぽいことを考える	1
	学ぶ意欲が高い	1		「発想」することが好き	1
	深い趣味・特技	1			

校舎 (8)	校舎がボロい	2	生活スタイル (7)	質素な生活	1
	ツタがからまった校舎	1		ゲタで学校に来る	1
	緑が多い	1		友達の家が近い	1
	広いようで狭い	1		流行を追わない	1
	立看板が多い	1		学校に棲みついている	1
	京都駅から遠い	1		ヒマそう	1
	スラム	1		学校に来ない人が多い	1
対「東大」 (6)	東大と対抗する存在	4	対「東大」 (2)	東大へのライバル意識	2
	東大より嫌みがない	1			
	東大よりやわらかい	1			
文化・伝統 (3)	古くて歴史がある	2	文化・伝統 (2)	関西弁	1
	文化を大事にする	1		東京と巨人が嫌い	1
総言明数：48			総言明数：44		

＊）セル内の数値は、そのカテゴリーにあてはまる回答をした被験者数を示す。また各テーマの後に挙げた括弧内の数値は、そのテーマについてなされた言明数の合計を示す。（以下の表においても同様。）

この結果を見ると、慶應大学生の京都大学に対するイメージ（集団イメージ）と、京都大学学生に対するイメージ（集団成員イメージ）とがかなりの部分、オーバーラップしていることがわかる。また「京大イメージ」を問う質問に対して「京大生イメージ」を答えた人がかなりいたが（14言明）、これも京大イメージと京大生イメージとがかなり不可分に結びついていることを示唆している。

内容を見ると、全体に、ポジティブなイメージが支配的であるが、同時に「自由」「個性」「頭がいい」「変人」などのように、特定のパターン化されたイメージが多くの慶應大学生に共有されており、ここにある種のステレオタイプを認めることができる。すなわち、ここで得られた典型的な京大（生）イメージとは、アカデミックで自由な学風の大学と、優れた知性とユニークな個性を持ち個人主義で流行にとらわれない生き方をする学生という映像である。そこでは、京大（生）の能力的側面に焦点を当てたイメージがつよい。またイメージ間の内容的矛盾は少なく、大学イメージと大学生イメージがかなり一貫していることを見て取ることができる。

それでは、これに対する京都大学生の慶應大学（生）に対する当初のイメージはどのようなものであったのだろうか。合宿前のプレ調査における京都大学生の慶應イメージを次の表4に示す。

表4 京都大学生の慶應大学に対するイメージ（プレ調査：合宿前）

慶應大学のイメージ			慶應大学の学生のイメージ		
テーマ	記述内容	人数	テーマ	記述内容	人数
美的スタイル (23)	校舎がきれいで充実	6	美的スタイル (18)	おしゃれ、スマート	8
	優美、洗練、かっこいい	5		慶應ボーイ	2
	おしゃれ	3		ゴージャス、派手	2
	都会的	2		上品	2
	洋風	2		香水の匂い	1
	文化的	1		ブランドのバッグ	1
	気高い	1		赤いボルシェ	1
	素敵な事務員のお姉さん	1		高い服	1
	女の子が多い	1	性格 (18)	さわやか、明るい	4
	光の射す庭	1		要領がいい、世間なれ	3
	重いイメージ	1		若々しい、アクティブ	2
大学組織、 学風 (7)	最先端、革新的	2		面白い人が多い	2
	若手のやり手教授が多い	2		優等生的、枠から出ない	2
	サポート体制の充実	1		穏やか	1
	商・経の入試が簡単	1		均質な集団	1
	キャンパスが離れ、遠い	1		公務員・官僚志向	1
				普通っぽい大学生	1
				くらい	1

経済的豊かさ (7))	お金持ち おぼっちゃま ハイソ	5 1 1	経済的豊かさ (12)	金持ちのおぼっちゃま 上流、家柄の良さ 親が医者、社長	8 2 2
歴史と伝統 (6)	歴史がある 卒業生のつながりが強い 伝統 親子のつながりが強い	2 2 1 1	生活スタイル (7)	遊び人 飲み会が多い 親のスネかじり 楽しそうに学生生活 カフェでのんびり いつも勉強している	2 1 1 1 1 1
外部の評価 (5)	有名な名門 企業の評価が高い あこがれの存在	3 1 1	学問・知性 (4)	頭がいい(きれる) 総合的な視点の持ち主 興味・関心が多岐にわたる	2 1 1
対「早稲田」 (2)	早大の敵 広末を早稲田にとられた	1 1	国際性 (4)	帰国子女が多い 語学に堪能	2 2
その他 (11)	福澤諭吉 漢字が難しい 黄金色 えんじ色 固い プライド高い 人が多い	3 1 1 1 1 1 1	その他 (2)	付属校出身の人が多い 金持ちと貧乏人の二極化	1 1
総言明数：61			総言明数：65		

京大生の対慶應イメージの記述に関して、ひとつ問題となることがある。KKJに参加した慶應大学生は全員、湘南藤沢キャンパス(SFC)の学生に限られていたが、ここで京大生から慶應に向けられたイメージの対象になっているのが「慶應大学(生)一般」なのか、それともSFCに特定化されたイメージなのか、明確でない、ということである。慶應側の参加者は、後に見るように慶應一般というよりも、かなりSFCに特定化されたアイデンティティを持っているようであるが、この区別がどの程度、京大側からの他者イメージに反映されているかは不明である。今後の調査においては特にこの点を明確化するための質問項目を用意する必要があるだろう。

表4を見ると、慶大生の京大イメージ(表3)の場合と同様に、ここでも慶應大学イメージと慶應大学生イメージとが大幅に重なっていることが見て取れる。そしてその内容は、慶大生の京大イメージとは大きく異なるものである。慶應大学(生)について、一見ポジティブなイメージが多く挙げられているが、その中にはかなり皮肉なニュアンスが含まれているのを感じ取ることができる。というのは、挙げられている肯定的イメージの大部分は、おしゃれ、優美、洗練、都会的等の美的次元に関するイメージ語か、或いは「お金持ち」という経済的豊かさに関するイメージであり、学風、校風や学問に関するテーマについては、あまり語られていないからである(慶大イメージ、慶大生イメージとも、美的スタイルに関する言明が一番多い)。つまり、京大生が慶應に対して抱くイメージには、言外に「金があるのをいいことに、オシャレや遊びにうつつをぬかず軽薄な大学生集団」というニュアンスが秘められていると考えられるのである。記述対象のテーマに関するこの偏向は、学風や学問、知性に関する記述の目立った慶應大学生の京大イメージと内容的に好対照をなしている。なお慶應大学生の性格的側面については、「要領がいい」「世間なれしている」「枠からはみ出ない」「公務員・官僚志向」など、行動様式や価値観における一種の保守性が強調されている。

ブレ調査における京大生の慶應に対するイメージをまとめてみると、おしゃれ、金持ち、価値観や行動様式における保守性、といった特徴に集約されるが、これは世間に流布しているいわゆる「慶應ボーイ」のイメージにかなり近い。慶大生の京大イメージとはまた別の意味で、ここにも他校イメージのステレオタイプ化を認めることができる。もっとも慶應に対して「重いイメージ」や「金持ちと貧乏人の二極化」など、一部にステレオタイプとは異質のイメージが表明されていることは、京大生の反応の特徴として見逃せない。

プレ調査における京大イメージと慶應イメージとの比較

表3に示した慶應生の京大（生）イメージと表4に示した京大生の慶應（生）イメージとの間には、内容的に大きな違いが見られる。具体的な記述内容に関してだけでなく、テーマに関しても歴史や伝統などを除けば共通項目があまりないのが目立つ。そして、プレ調査において両大学生によって挙げられた他校イメージは、総じて、世間一般に流布している京都大学（生）ならびに慶應大学（生）についてのステレオタイプのイメージにかなり合致している。つまり全体的に、慶大生の京大イメージは、学問的・能力的側面に集中しており、それに対して京大生の慶應イメージは経済的側面や美的・趣味的評価に偏っているのである。プレ調査で見られた両大学のイメージをキャッチフレーズ風にひとことで表すなら「学問の京大、おしゃれの慶應」とでも言えようか。

京大と慶應とで、イメージの上で特に対照的な結果が出た次元が2つある。ひとつは美的センスに関する次元で、慶應の「おしゃれ、洗練」に対して、京大の「パンカラ、垢抜けない」が対置される。もう一つの軸は、価値観、行動様式に関するもので、「保守的で枠から出ない」慶大生に対して、「革新的で個性が強く型破り」な京大生が同軸上の反対側に位置する結果となっている。

なお、他校イメージの評価的側面に関しては、京大、慶大のいずれも「ステレオタイプ化した肯定的イメージ」という点で共通している。但し、先述したように京大生の慶應イメージが肯定的でありながら皮肉なニュアンスを帯びているのに対して、慶大生の京大イメージは、一見相手のパンカラな武骨さを指摘しながらも（「校舎がボロい」「ゲタで学校に来る」etc.）、その背後に一種の畏敬やコンプレックスを感じさせる点で異なっている。

3.2 プレ調査における鏡映的自校イメージ

次に、同じく合宿前のプレ調査における慶應大学および京都大学生の鏡映的自己イメージを見てみたい。ここで記述されるのは、「相手方の大学から見た自分たちのイメージ」ということであるが、自分たちを見ている相手校の学生の視線というのは、あくまでも自分の内省のなかで想像された視線である点に注意しておかねばならない。そして前述したように、鏡映的自己イメージは常に他者イメージとの関連で捉える必要がある。

表5は、慶應大学生の鏡映的自校イメージ、即ち京都大学の学生は自分たちのことをどう見ていると考えているか（想像上の視線を経由した慶大生の自己像）を示している。

表5 慶應大学生の鏡映的自己イメージ（プレ調査：合宿前）

慶應大学生の鏡映的自校イメージ			慶應大学の学生のイメージ		
テーマ	記述内容	人数	テーマ	記述内容	人数
大学組織、 学風 (11)	授業料が高い	2	美的スタイル (19)	おしゃれ、スマート	6
	最先端	1		慶應ボーイ	3
	時代の異端児	1		格好を気にする	3
	学則が厳しい	1		ブランド志向	3
	授業の出席率が高い	1		都会的	1
	勉強を押しつけない	1		上品	1
	真面目な雰囲気でない	1		ファッション雑誌に登場	1
	コネ社会	1		饅頭なんて好きじゃない	1
	キャンパスが狭い	1			
	内部進学と一般との相克	1			
美的スタイル (8)	上品、ハイソサエティー	2	性格 (14)	あまり勉強しない遊び人	7
	華やか、派手	2		要領がいい、世渡り上手	3
	おしゃれ	2		授業にあまり出ない	1
	キャンパスがきれい	1		好き勝手な行動	1
	雰囲気が明るい	1		つかみどころがない	1
経済的豊かさ (6)	お金持ち	6	経済的豊かさ (10)	慶應生だけで固まる	1
				お金持ち	7
				お坊ちゃま、お嬢さま	3

外部の評価 (5)	ブランド色が強い大学	3	学問・知性 (3)	頭がいい	1
	エリート養成校	1		エリート	1
	私学の雄	1		実学志向	1
対「早稲田」 (2)	早稲田のライバル	2	コンピュータ (2)	コンピュータ「おたく」(SFC)	1
				ラップトップを持ち歩く	1
歴史と伝統 (1)	歴史がある	1	対「早稲田」 (1)	早稲田に気に入っている	1
その他 (7)	福澤諭吉	4			
	悪いイメージはない	1			
	特にイメージはない	1			
	こわい(犯罪事件)	1			
総言明数：40			総言明数：49		

この表5の結果を、表4に示した京大生の慶應イメージと比較すると、全般に、両者の一致度が高いことがわかる。つまり、おしゃれで都会的なイメージ、経済的豊かさ、時代の先端をゆく大学体制などが、両者に共通して挙げられている。ここで聞かれているのは直接的な自己像ではなく、あくまでも「相手は自分のことをどう見ているか」という鏡映イメージであるわけで、これと実際のその他者の視線の質とがかなり一致していたということは、この被験者集団の自己を客観化して他者の視点から見る能力の高さを示していると言えるかもしれない。

しかし慶應生の鏡映的母校イメージでは、慶應の学風やキャンパス状況についてのイメージが最も多かったのに対して、京大生の慶應イメージでは、大学、学生にいずれについても、おしゃれやファッション、都会的ななどのいわゆる「美的スタイル」に関するイメージが最も多く出されていた。つまり、京大生は慶應生が想像する以上に、慶應に対してステレオタイプのイメージを当初持っていたと言えるのである。

またここで見られるもう一つの特徴は、慶大生においてはポジティブな鏡映的自己イメージが支配的だということである。「あまり勉強しない遊び人」など多少皮肉な自己批判的ニュアンスはあるが、全体としてはあまり屈折しておらず、「エリート」「私学の雄」「悪いイメージはない」といった率直な自己肯定的評価イメージが語られているのが、後に見る京大生の鏡映的自己イメージと大きく異なる点である。

なお京大生の慶應生イメージ(表4)では、国際性があげられていた(4言明)が、慶大生の鏡映的自己イメージでは、国際性はまったく触れられておらず、コンピュータのイメージが出ている(2言明)ことが注目される。

次に、京都大学生の鏡映的母校(生)イメージを表6に提示する。

表6 京都大学生の鏡映的自己イメージ(プレ調査：合宿前)

京都大学生の鏡映的母校イメージ			京都大学生の鏡映的母校学生イメージ		
テーマ	記述内容	人数	テーマ	記述内容	人数
学風・校風 (28)	自由	8	性格 (48)	まじめ、ガリ勉	6
	休講が多い	2		ださい、スマートでない	6
	単位がとりやすい	2		変わった人(変人)が多い	5
	活発	2		狂っている、マニアック	5
	ださい	2		固い、恋愛・服装に疎い	4
	授業料が安い	1		個性的	3
	入試問題の傾向は不変	1		地味、落ち着いている	3
	左翼色が強い	1		自閉気味、社会順応性なし	3
	学問中心	1		反体制	2
	臓器移植	1		バランスを欠く、あぶない	2
	威厳	1		心の底では傲慢	2
	暗いイメージ	1		のんびり気楽	1
	一見さんお断り	1		独立独歩、自主独立	1
	のんびりしている	1		理屈っぽい	1
	ひっそりしている	1		庶民的なエリート集団	1

	自転車の群れ 白銀色	1 1		たくましい 暗い いい加減	1 1 1
校舎 (16)	時計台 きたない 遠い、田舎 校舎が古い 設備がよくない おもむき深い 楠の木	5 3 3 2 1 1 1	生活スタイル (8)	貧乏、貧乏書生のイメージ 講義に出ない 自由奔放な学生生活 河原で本を読んでいる 酒呑み集団 ひま	2 2 1 1 1 1
文化・伝統 (10)	古い 伝統的 歴史がある 大正ロマン	6 2 1 1	文化・伝統 (3)	和風 古風 関西弁が多い	1 1 1
人 (5)	インテリ（ノーベル賞） 女子が異様に少ない 変わった人が多い	2 2 1	学問・知性 (3)	賢い、頭がいい 勉強せずとも試験できる	2 1
対「東大」 (4)	東大と対抗 東大に行けなかった落人 東大と比べて個性的 西の雄	2 1 1 1			
総言明数：63			総言明数：62		

この表6の結果を見ると、先ほどの慶大生の鏡映的自己イメージの場合とは異なって、京大生の鏡映的自己イメージと慶大生の京大イメージ（表3）との間には、かなりのズレが認められる。これは主に、慶大生の京大イメージが「自分をしっかり持っている」「頭がいい」等、肯定的な表現で語られているのに対して、京大生の鏡映的自己イメージがかなり否定的ニュアンスを含んだ語で満たされていることに因っている。慶應大学生の概ねポジティブな鏡映的自己イメージ（表5）に比べて、京都大学生の鏡映的自己イメージには、「古い」「汚い」「暗い」「自由放任でいいかげん」「変人の集まり」「ダサい」「授業に出ない」「東大にいけなかった落人たち」等の一見、否定的な言辞が並んでいるのである。しかしよく見ると、これは裏を返した自尊表現であることがわかってくる。屈折しているのは表現法であって、プライドの性質そのものではないと考えられる。自らの所属する大学（またその成員）について、これだけ無遠慮にこだわりなく否定的言辞を弄することができるのは、その背後に強力で安定した自信と自尊感情（あるいは優越意識）があるからだと思われる。これは、否定的表現にもかかわらず、京大生の自己イメージが非常に雄弁で多様性を持っていることにも示唆されている（言明数、カテゴリーの種類とも非常に数が多く、多岐に亘っている）。本当に否定的な自己概念を持っている場合には、このように多彩で豊かなイメージは出てこないはずであるし、またそれを語ることに抵抗を感じるものである。しかし京都大学生は、むしろこうした否定的イメージを表現することを楽しんでいるように見受けられる。これは自尊感情が傷ついておらず、むしろ非常にポジティブな形で温存されていることを示唆すると同時に、自分自身から距離を置いて、自らを戯画化するという高度に知性的な態度が支配的であることを物語っている。ここで見られた逆説的現象は、より一般的に、他者との相互作用における自尊感情（self-esteem）のあり方と他者への態度との関係を考える上で、きわめて示唆に富んだ結果であると言える。

また、京大生の鏡映的自己イメージには（慶大生の京大イメージにおいてもそうだが）「講義に出ない」というイメージと「学問中心でかたい」というイメージの両方が現れてくる。両者の行動・態度を相互に矛盾なく共存する特徴として捉えているとすれば、京大の「自由で個性的」な学風とも内的整合性を持つことになる。自己イメージがどの程度、内的整合性・一貫性を持っているかは、自己概念がどれだけ明確化しているかを測る一つの指標と考えられるので、ここにも京大生の強い自己内省力が現れていると見ることができよう。

これに対して、京大生の鏡映的母校イメージで出現する「時計台」は、大学のシンボリックなものを表していると考えられるが、それが具体的にそのようなイメージの内実を含み、そのような評価性を持つのかは、この調査からは明

らかになってこない。同じことは慶大生の鏡映的自校イメージおよび京大生の慶應イメージで出現する「福澤諭吉」についても当てはまることである。

3.3 ポスト調査における他校イメージ

KKJ合宿の後、それを通じて京大生、慶大生それぞれの自他イメージにどのような変化が生じたかを探るためにポスト調査が行われた。次に示す表7は、合宿後に慶應大学生が京都大学（生）に対してどのようなイメージを持つようになったかを示している。

表7 慶應大学生の京都大学に対するイメージ（ポスト調査：合宿後）

京都大学のイメージ			京都大学の学生のイメージ			
テーマ	記述内容	人数	テーマ	記述内容	人数	
人 (12)	多様でユニークな個性	7	性格 (28)	個性が強くて多様	5	
	知的、論理的	2		自分をしっかり持っている	5	
	天才を多く輩出	1		自然体で自分を出している	3	
	いっしょにいて楽しい	1		暖かい、優しい、人間味	3	
	等身大のイメージ	1		自由、形に拘らない	2	
学風・校風 (11)	自由・放任	6		勢いがある、強い意志	2	
	アカデミック	2		自分の道をゆく	2	
	既成の枠に縛られない	1		流行等に対してアンチ	1	
	のびのびしている	1		とても面白いがたがた	1	
	やはり国立大学	1		それほどバンカラではない	1	
文化・伝統 (3)	伝統	1		学問・知性 (4)	明るい	1
	古都の大学	1			地味	1
	吉田寮	1			コンプレックスがある	1
校舎(1)	施設があまりよくない	1	学者肌		1	
			勉強コツコツタイプ	1		
			物事を深く掘り下げてゆく	1		
			論理的思考をする	1		
総言明数：27			総言明数：32			

まずこれを見て気づくのは、全体に、合宿後に行なわれたポスト調査では、プレ調査に比べて記述量が減少しているということである（京大イメージの言明数は48から27へ減少、京大生イメージの言明数は44から32へ減少）。

慶大生の京大イメージは、全体の傾向としては、プレ調査の時と基本的に大きく変わっていない。自由でアカデミックな学風と個性が強くまじめな学生というイメージが依然として支配的である。しかし内容を細かく見てゆくと幾つかの点で変化が見られる。

まずプレ調査の時点では、慶應大学生の中で、京大生の「個性」と「自由」とは一体のイメージとして捉えられていたが、ポスト調査ではこの両者が分離し、かつ個性の多様性が一層強調されるようになってきている。「イメージとして、まとまらない程、いろんな人がいる。」という回答は、この多様性の認識を端的に示したものといえよう。これは、合宿というオフライン状況での直接的な対面コミュニケーションを通じて個々の京大生のさまざまな個性を見知るにおよんで、京大生に対するイメージが以前の抽象的で漠然としたものから、より具体的で分化したものに変わったためであろうと思われる。

また京大生に対するイメージに関しては、「あたたかい」「やさしい」「面白い」など、個人的な親しみを感じさせる人間味を強調する意見が目立つようになった。これは合宿前のプレ調査では全く見られなかった特徴で、ここには明らかに合宿での個人レベルでの相互作用を通じて、これまで集团的イメージで抽象的に捉えていた京都大学生を生きた生身の人間として感じるようになったというプロセスが影響を与えていると推測される。プレ調査では多かった知的優秀性についての記述（「頭がいい」「理系」等）もポスト調査では姿を消し、「勉強コツコツタイプ」や「物事

を深く掘り下げてゆく」など、知的真摯さともいべき性格的特徴の記述にとって代わられている。ここにも慶大生の京大生に対する心理的距離感の縮小を認めることができる。

大学イメージに関しても、プレ調査では学風・校風といった抽象的イメージがジャンルとして一番多かったのが、ポスト調査では、「人」についてのイメージのほうが優勢になっている。つまり、イメージがそれだけ具体化していることを伺わせるのである。プレ調査では、東大に対抗する存在としての京大イメージがかなり強く表明されていた（6言明）が、これがポスト調査では全く消えているのも、「学風」という抽象的イメージの後退と対応する変化として興味深い。

同じく、「文化・伝統」（関西弁、アンチ巨人）や「生活スタイル」のカテゴリーに入る記述もポスト調査では姿を消し、京大生イメージの記述はもっぱら性格や知性など「人」に直接関わる特性に集中してきている。

以上、慶大生の京大イメージに関して、プレ調査からポスト調査への変化の様相をまとめると、まず京大（生）イメージが合宿を通じて、距離感のあるイメージから、より親しみのある等身大のイメージへ変化していることが指摘できる。またステレオタイプに当て嵌められないさまざまな個性があるという多様性の認知もプレ調査との際立った相異として重要である。

では次に、京都大学生の慶應イメージが合宿を経てどう変化したかを見てみたい。表8は合宿後のポスト調査における京大生の慶應イメージを示している。

表8 京都大学生の慶應大学に対するイメージ（ポスト調査：合宿後）

慶應大学のイメージ			慶應大学の学生のイメージ		
テーマ	記述内容	人数	テーマ	記述内容	人数
学風・校風 (22)	時代の先端、先進的	6	性格 (24)	いろんな人がいる	3
	国際的	4		社会とのつながり、社会性	2
	コンピュータ教育の充実	3		視野が広い、多角的、	2
	懐が広い、視野が広い	2		うすくち、さっぱりしてる	2
	大学として努力している	1		地味、控えめ	2
	設備、環境が整っている	1		現代の若者	1
	人材育成のためのバックアップ体制	1		賢いけどぶつうの学生	1
	実利的なことを教える	1		バランス感覚が優れる	1
	京大とは違った個性	1		自由	1
	静かな落ち着いたイメージ	1		明るく活動的	1
	軽いイメージ	1		気さくで話しやすい	1
美的スタイル (4)	きれいな	3		生活力のある人が多い	1
	都会的	1		「自分」のある人たち	1
経済的豊かさ (3)	やっぱりお金持ち	3		思いやりのある人が多い	1
				異質なものを認められる	1
積極的関与 (2)	SFCはおもしろそう	1		プレゼンテーション好き	1
	1度ゼミに参加したい	1		恋愛のことをよく話す	1
歴史と伝統 (1)	歴史がある	1		学部によって人間が違う	1
その他：イメージの変化 (3)	合宿前のイメージとは	1	美的スタイル (7)	おしゃれ	5
	180度変わった			カッコいい、スマート	2
	ボンボンというイメージが	1	経済的豊かさ (2)	金持ち	1
	なくなった			金持ちと貧乏人の2極化	1
生活スタイル (2)			生活スタイル (2)	ちゃんと学校に行ってる	1
				自宅生が多い	1
学問・知性 (2)			学問・知性 (2)	頭良い	1
				知識が多い	1
国際性 (2)			国際性 (2)	英語しゃべる人多そう	1
				国際派志向	1

当初のイメージは緩和されたが偏見はまだある	1	京大との比較 (3)	非常に京大生に似てる 僕らと「同質」の部分多い 京大生ほど理屈っぽくない	1 1 1
		その他：イメージの変化 (1)	当初持っていたイメージはほとんど緩和された	1
総言明数：35		総言明数：43		

ここで最も顕著な特徴は、合宿前のプレ調査時と比べて、慶應大学（生）イメージが多様化していることである。これはステレオタイプのイメージからの逸脱といってもよい。京都大学生の回答についても、ポスト調査において記述量自体はプレ調査時よりも減少しているのだが（慶大イメージ：61→35、慶大生イメージ：65→43）、イメージの数はほとんど変わっていないことから、イメージが特定のタイプに集中せず、分散している様子が窺える。

慶大（生）イメージの内容に関しても、プレ調査と比べてかなりの違いが見られる。慶應大学については、「おしゃれ」「金持ち大学」といった美的スタイルや経済的豊かさに関するイメージ（プレ調査では支配的だった）が後退し、先進性、国際性、コンピュータをはじめとする情報教育の充実など、時代の先端をゆく大学としての取り組みや工夫がプレ調査の時と比べてはるかに強くイメージの前面に出てきている。

これと同時に、慶應大学生についてのイメージも極めて多様化している。「性格」カテゴリーに属するイメージの数は、プレ調査では10種類だったが、ポスト調査では18種類に増えている。慶大生について「おしゃれ」をイメージする京大生が多いのは相変わらずだが、一括りにできない多様性の発見や（「いろんな人がいる」等）、京大生との同質性の認知など（「非常に京大生に似ている」「僕らと『同質』の部分が多い」）は、合宿前には見られなかった反応である。他校の学生が多様性をもった集団であることの認知は、慶大生の京大生イメージ、京大生の慶大生イメージの双方に共通した特徴で、合宿でのオフライン上の共同生活体験がもたらした主要な効果と見做してもよいのではないだろうか。

またこれも慶大生の京大生イメージの場合と同様に、相手との距離感を前提とした堅いイメージが後退し、「思いやり」「気さく」といった、より等身大で親しみのあるイメージが多くなってきていることも特徴である。そもそも自集団である京大生との比較（上記）が現われてきているのも、慶應という他集団に対する心理的距離感の縮小のあらわれと考えてよいであろう。

ポスト調査における慶大生の京大イメージで、「東大への対抗」が消えているのと同様、京大生の慶應イメージにおいても、早稲田とのライバル関係に焦点をあてた言明は消失している。そもそも「京大vs東大」「慶應vs早稲田」という軸でイメージを描くこと自体、かなり世間一般のステレオタイプの枠に囚われて相手集団を一般化しているわけで、他大学に対するこういう捉え方が消失し、むしろ自分たちに引き寄せてイメージを形成するようになったということは、回答の変化に関する他の指標と照らし合わせると大変興味深い現象である。

さらに京大側の慶應イメージでは、「慶應はともかく、SFCはおもしろそう」「ぜひ1度ゼミに参加してみたい」といった積極的関与を求める姿勢（厳密には「イメージ」ではないが）も、合宿後のポスト調査に至って始めて現れてきており、これも上記のより親しみのあるイメージと即応して、心理的距離の縮小のあらわれと解釈することができる。なお、「慶應」一般とSFCとの区別もポスト調査において始めて述べられた点である。

しかし、ポスト調査において、慶應生の京大（生）イメージは、比較的少数のイメージに集約されたのに、京大生の慶應（生）イメージは、なぜこれほど多様化したのだろうか。これは合宿をはさむイメージの変化に関して、京大と慶應との間に見られた顕著な相違点であり、両集団の自己イメージのあり方との関連で考察に値する興味深い問題である。

ポスト調査の結果についてもうひとつ重要な点は、プレ調査時には「慶應大学イメージ」と「慶應大学学生イメージ」とは大幅に一致していたが、ポスト調査では、両者の間かなりの違いが認められることである。他校イメージと他校生イメージとのこの分離は、相手集団に対する見方がより分化されたものになっていったことと密接に関係しあっていると考えられる。ただし、他校イメージと他校生イメージとの分離は、慶應大学生の回答にあっては、記述

量が少ないこともあり、京都大学生のデータにおけるほど顕著ではない。

3.4 イメージの変化とその理由

以上、プレ調査とポスト調査との比較でイメージの変化について述べてきたことを別の観点から確認するために、被験者自身に相手大学のイメージが変化したかどうか（およびその理由）を尋ねた結果を以下に示す。

表9 相手大学についてのイメージの変化（ポスト調査：合宿後）

京都大学（生）イメージ （慶應大学生への質問）		慶應大学（生）イメージ （京都大学生への質問）	
変わった	14	変わった	18
変わらない	3	変わらない	2
Σ	17	Σ	20

表9を見てわかるように、慶應大学生、京都大学生とも、ほとんどの被験者が合宿体験を通じて、相手大学（学生）に対するイメージは変化した、と回答している。ではイメージが変化したと答えた被験者は、その変化の理由を何だと思っているか、その主観的に認知された理由を示したのが表9aである。

表9a 相手大学についてのイメージが変化した理由

京大イメージが変わった理由（慶應大学生の回答）		慶應イメージが変わった理由（京都大学生の回答）	
カテゴリー	人数	カテゴリー	人数
実際に1人1人にふれ合った（会って話した）から	7	実際に1人1人にふれ合った（会って話した）から	12
一括りにできない個性の多様性に気づいた	4	これまでのイメージが偏見だった	3
自分たちと変わらないことが分かった	2	自分たちと近い（違わない）ことが分かった	2
実際は想像以上に親しみやすい	2	ふれ合って共感した	1
3日間を通じ徐々に変化した	1	実際はすごくいい人達だった	1
Σ	16	Σ	19

ここに挙げられている理由は、これまで見てきた他校イメージの変化（表3→表7；表4→表8）の方向性とも内容的に対応している。つまり他校イメージは、双方向ともに、より等身大の親しみのあるイメージへ、また多様性を含むイメージへと変化しているが、ここに挙げられているような多様な個性とじかに出会って対話をはじめとする関わりを持ったこと、そこで相手方も生きた個人であり、また自分たちとそれほど違わないことを経験したことが、これまでの他校イメージを「偏見」としてそこから距離を置き、ここに見られるようなイメージ変化を引き起こした要因であると被験者自身も認知しているのである。これについては、京大生と慶應生の回答内容は、驚くほど類似している。イメージ変化の理由についての両集団の回答内容の類似は、合宿において、「同床異夢」ではなく、真の「出会い」が起こったことを示唆するデータとして解釈できるかもしれない。

では鏡映的自校イメージについては、京大生および慶大生は合宿を通じて変化したと感じているだろうか。それを示すのが、表10である。

表10 鏡映的自校イメージの変化（ポスト調査：合宿後）

慶應大学（生）イメージ （慶應大学生への質問）		京都大学（生）イメージ （京都大学生への質問）	
変わった	15	変わった	12
変わらない	2	変わらない	7
無回答	0	無回答	1
Σ	17	Σ	20

慶應大学生のほとんど（17名中15名）は、慶應についての鏡映イメージは、KKJ合宿の体験を通じて「変わった」と回答した。しかしこの間に回答した京都大学生19名のうち、鏡映的自校イメージが変わったと答えたのが12名で、あとの7名は「変わらない」と答えている。つまり慶大生に比べて京大生の鏡映的自己イメージは比較的頑健であるということもできる。この結果は、どう説明できるだろうか？

まず鏡映的自校イメージが変化したと答えた被験者が挙げた理由を、表10aに示す。

表10a 鏡映的自校イメージが変化した理由

慶大イメージが変わった理由（慶應大学生の回答）		京大イメージが変わった理由（京都大学生の回答）	
カテゴリー	人数	カテゴリー	人数
自分たちの実際を見てもらった。実際と先入観とは違う	6	人それぞれ個性が違うことを認識した。個のイメージは全体のイメージにまざる	5
1人1人の個性に触れてもらったこと	2	実際に接してみたから。イメージは実際に接すると変わる	4
SFC側も京都側と変わらないものを持っていたため	2	個の内面に触れた	3
京大生からイメージが変わったと言われた	2	慶大生がイメージが変わったと言っていた	3
いつも以上に自分を出したから	1	なんとなく	1
イメージゲームによるイメージの交換が変化を引き起こした	1		
外面的イメージが崩れ、内面が加わってきたから	1		
京大生は三田、日吉の学生で慶大イメージを作っていたから	1		
Σ	16	Σ	16

この回答も、他校イメージの変化の理由とかなりの程度、対応している。重要なのは、「実際に接することによるイメージ（偏見）の崩壊」という想像・現実の軸に関わる契機と、「相手の個の内面に触れることによって個のイメージが全体のイメージに優越するようになった」という全体・個の軸に関わる契機が絡み合っていることである。ここでも、慶大生と京大生の回答の共通性が目立っている。

慶大生の京大イメージは変わらなかっただろうと答えた京都大学生7名について「変化しなかった理由」を問うたところ、「パンカラ、自由、貧乏のイメージにマッチする人々が多くいたから」「みんなけっこう『京大生』っぽくしていたから」「変なのは変だから」といったステレオタイプのある種の妥当性を指摘する発言、「きものを着ていったことで見た目のイメージは変化してないと思う」「げたや着物がいたから。しかし内面的なもののイメージは変わったと思う」のように潜在的変化を認める発言、「あれだけの人間だけを見て決められては困る」のように合宿での経験が逆に新たな一般化を引き起こすことへの警戒感など、いずれも合宿での経験から多少距離を置いた内省的な回答が得られた（あと一人は「わからない」）。

4. まとめと展望

今回のKKJ2000の実践の中で行なわれた京都大学生と慶應大学生の相互イメージに関する調査は、修善寺での合宿というオフラインでの対面相互作用が、当初抱いていた自他の集団イメージおよび集団成員イメージを変化させる大きな契機として働いたことを実証している。仮説1（ステレオタイプから多様で親近感のあるイメージへの変化）は、得られたデータの全体を通じて強く支持される結果となった。京大生、慶大生双方において、心理的距離感の縮小に伴うより等身大の他校生イメージが合宿での体験を通して形成されたことは、広義の異文化理解という観点からして、本KKJ実践のひとつの明確な成果と位置付けることができよう。春学期の終了後にSFC側のKKJスタッフによって慶應大学生のKKJ参加者に対して行なわれたポストインタビューの中でこのイメージの変化に触れて「KKJ

で行く前は京大の人ってどんな人がいるんだろうっていうイメージが全然私の中になくって、それこそ東大の関西バージョンくらいのおぼろげなものしかなかったの - 中略 - 不安があったんですけど、実際に行って会ってみて、行く前に違いばかりを意識していたのに比べて、行ってから、なんか同じ大学生なんだっていう、同じなんだって気づく部分がとても多くて…」(Oさん)と述べているが、ここで彼女が述べているイメージの具体化と自分たちとの共通性の認識は、今回の調査で見られたイメージ変化の重要な側面をよく表している。

また仮説2(他校イメージと他校生イメージの分化)については、特に京大生の慶應イメージに関して、はっきりとしたかたちで支持されたが、慶大生の京大イメージに関しては、記述量が相対的に少ないこともあって、予想されたこの分化の過程はあまりはっきりとは示されなかった。仮説3(肯定的自己イメージが好意的な他校イメージをもたらし)については、本稿の枠内では残念ながら検証を行うことができなかった。鏡映的自校イメージと他校イメージとの関係を体系的に明らかにするためには、今回行なったような集団レベルでのデータの記述だけでなく、同一被験者内で両者がどう関連しているのかを個人レベルで分析していく必要がある。またこれと関連して、同一被験者内で、プレ調査からポスト調査に至る間に、どのようにイメージが変化したかを細かく見てゆくことも必要である。集団レベルの変化だけからでは見えてこないイメージ変化のパターンがそこに潜んでいる可能性があるからである。

全体に、プレ調査からポスト調査へと至る間のイメージ変化のパターンは、慶大生、京大生ともかなり共通していることが今回の調査で示された。しかし、それぞれの鏡映的自己イメージおよび他校イメージの内容には、かなり大きな違いが見られた。このイメージの内容的側面が、合宿のような場での相互作用のあり方自体にどのような影響を与えているかは、今回は調査することができなかった。しかし序論でも述べた通り、相互作用がイメージを変えるだけでなく、逆に当事者の自他イメージが相互作用の質を規定してゆくプロセスも同時に重要であるので、これについては今後のKKJ実践の中で具体的考察の対象としてゆきたいと考えている。

これは、KKJの中で、京都大学と慶應大学とが共同の教育実践の場を構築した、という組み合わせの特殊性にも絡んでくる問題である。そもそもイメージというのは、社会的相互作用と密接に関わりあっている。鏡映的自己イメージというものの、そこでどのような他者を前提とするかによって当然変わってくる可能性が高いのである。KKJ実践においては、対照的な性格を持ちながらも世間的評価や卒業後のキャリア展望といった側面からはかなり類似したところのある京都大学と慶應大学という2大学の学生間で相互作用ならびにイメージの交換が行なわれた。もし相互作用を行なう相手集団が別の大学であったなら、他校イメージのみならず、鏡映的自校イメージも今回の調査とはかなり異なったものになることも予想される。個人レベルでも集団レベルでも、自分とは常に「どの他者に対しての自分なのか」という鏡映的側面を不可避的に含んでいるからである。その意味で、同一集団を対象にして、さまざまに異なる他校集団との相互作用とそこでの相互イメージのやり取りを比較分析すること(たとえば、慶應SFCの集団にとっては、相手が東大だったら、早稲田だったら、ICUだったら、それぞれの場合の自他イメージは今回のKKJの場合と比べてどうか、という問いかけ)は、集団間相互作用とそこでの自他イメージの関わりをより一般化した形で捉えてゆく上で、またイメージというものの重層性を明らかにしてゆく上で大変意味のある課題であろうと思われるのである。

KKJの共同教育実践における京大と慶大の間のコミュニケーションは、オンライン(Web掲示板)とオフラインという2種の様式が共存している。イメージの変化に焦点を合わせるならば、オンライン上でのイメージ形成のプロセスと合宿というオフラインでのイメージ形成のプロセスとがそれぞれどう効いてきているのかを分けて比較考察する必要がある。今回の調査では、学期中ごろのプレ調査、合宿後のポスト調査という2時点でのデータ収集しか行なわなかったの、観察されたイメージ変化の中に、両者の要因が混在してしまっているが、できれば、1)学期が始まる時点、2)オンラインでの両グループ間の相互作用がかなり進んだ学期の中間点、そして3)合宿でのオフライン・コミュニケーションを体験した後、という3時点でのイメージの変化を見ることによってオンライン・コミュニケーションと比べてのオフライン・コミュニケーションの意味や効果がいっそう明確化されると期待される。これは今後の研究課題である。

もうひとつ、今後の研究課題として、集団イメージと個のイメージとの関係についての分析がある。我々の自我は、他者との社会的相互作用の中で自己や他者についてのイメージを重層的に積み上げながら成長し、発達してゆくわけだが(柏木, 1983; 榎本, 1998)、そこでは自己イメージ、自集団イメージ、自集団の成員イメージ、他者イメージ、

他集団イメージ、他集団の成員イメージの6つが錯綜しながら構造的連関を形作っていると考えられる。今回の調査では、専ら集団イメージと集団成員イメージとの関係を探るにとどまったが、本来はこうした教育実践に参加している個々の学生個人の自己概念や自尊感情（self-esteem）のあり方が本稿での調査対象となった集団レベルのイメージ形成にも大きな役割を果たしている筈である（北山, 1998）。狭義の自己概念や自尊感情だけでなく、①その被験者の自大学イメージが肯定的か否定的か、②KKJ実践への満足度といった、イメージおよびその変化と関連していると予想される個人内要因をも含めて、大学イメージと個人イメージとの関連を体系的に研究してゆくことは今後に残された重要な課題である。それを通じて、今回のイメージ調査の結果を、自己理論、特に「鏡映的自己」理論および自尊感情（self-esteem）の理論の観点からより広い文脈で理論的に位置付けてゆくことが可能になるであろう。

なお最後に、データ処理の方法に関して2つほど反省点を述べておきたい。

1) 今回のイメージ調査はもっぱら自由記述に基づく定性的データを用いて質的な分析を行なったが、次のステップとしてこれを数量化する方が考えられてもよい。特に、それぞれのカテゴリーの言明数が、全体の記述量のなかで何パーセントを占めているかを算出することによって、そこでのイメージがどの領域に偏っているかと端的に知ることができるし、また大学イメージ↔大学生イメージ、他校イメージ↔鏡映的自校イメージ、慶大イメージ↔京大イメージ、プレ調査↔ポスト調査という4つの次元に関するイメージの比較がしやすくなるという利点がある。

2) 2人の評者によるクロス評定を行なったとはいえ、今回の調査におけるカテゴリー分けは主観的恣意性の排りを十分には免れない。SD法などの統計的手法を用いて、他校・自校イメージに関してより客観性のあるカテゴリー体系を作り上げることは心理測定論的観点からも重視すべき今後の課題である。

謝辞：

本論文の執筆に当たっては、慶應義塾大学総合政策学部の井下理教授より、理論構成および方法論に関して多大の御教示を賜った。また調査データの集計に当たっては、SFC研究所の佐藤綾子氏に第2評定者として大変助けて頂いた。お二人に対し、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。またデータの収集にあたって快く御協力、御支援を頂いた京都大学高等教育教授システム開発センターのスタッフの先生方に心より深く感謝申し上げる。

なお本研究は、2000年度森泰吉郎記念研究振興基金による助成によって進められたものである。

参考文献

- Adler, P.S. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15(4), 13-23.
- Baldwin, J.M. (1902). *Social and ethical interpretations in mental development*. New York: Macmillan.
- Berry, J.W. & Pleasants, M. (1984). *Ethnic tolerance in plural societies*. International Conference on Authoritarianism and Dogmatism, Potsdam, New York.
- Cooley, C.H. (1902). *Human nature and the social order*. New York: Scriber.
- 榎本博明 (1998). 「自己」の心理学. 東京：サイエンス社.
- 星野命 (1983). 子どもたちの異文化体験とアイデンティティ. In: 小林哲也 (編) 異文化に育つ子どもたち (pp.29 - 61). 東京：有斐閣新書.
- 井下理 (2000). 新規教育プログラムの研究開発：企画設計を中心に. In: KKJ - Kyoto-Keio Joint Seminar - 何が起こったか、～授業・合宿・インターネットを通じた学び～ (京都大学高等教育叢書7) (pp.12 - 16). 京都：京都大学高等教育教授システム開発センター.
- 梶田毅一 (1988). *自己意識の心理学*. 東京：東京大学出版会.
- 柏木恵子 (1983). *子どもの「自己」の発達*. 東京：東京大学出版会.
- 北山忍 (1998). *自己と感情—文化心理学による問いかけ*. 東京：共立出版.

- Kobayashi, M. (1995). Selbstkonzept und Empathie im Kulturvergleich: Ein Vergleich deutscher und japanischer Kinder. Konstanz: Universitätsverlag Konstanz.
- 近藤裕 (1981). カルチュア・ショックの心理. 東京: 創元社.
- Mead, G.H. (1934). Mind, self and society: From the standpoint of a social behaviorist. Chicago: University of Chicago Press.
- Oppenheimer, L., Warnars-Kleverlaan, N. & Molenaar, P.C.M. (1990). Children's conceptions of selfhood and others: Self-other differentiation. In: L. Oppenheimer (Ed.), The Self-Concept (pp.45-61). Berlin: Springer.
- Shavelson, R.J., Hubner, J.J., & Stanton, G.C. (1976). Self-concept: Validation of construct interpretations. Review of Educational Research, 46, 407-441.
- 神藤貴昭, 田口真奈, 村上正行 (2000). KKJ実践における授業設計と教員の役割. 2000年度日本教育工学会での発表原稿.
- 田中每実 (2000). KKJ (京都大学慶應義塾大学連携ゼミ) 実践の前提と展開. In: KKJ-Kyoto-Keio Joint Seminar で何が起こったか. ～授業・合宿・インターネットを通じた学び～ (京都大学高等教育叢書7) (pp.1 - 11). 京都: 京都大学高等教育教授システム開発センター.
- 横田雅弘 (1997). 留学生の適応と教育. In: 江淵一公 (編) 異文化間教育研究入門 (pp.67 - 84). 東京: 玉川大学出版部.